

# 京都大学人文科学研究所国際研究ミーティング実施報告書

## 1. 国際研究ミーティングの名称

龍門石窟の日中共同研究

## 2. 主宰責任者氏名

焦 建輝(中国龍門石窟研究院・副研究館員)

## 3. 開催日時等およびプログラム(講演者名または報告者名を明記してください)

### ①日時:2018年12月4日 14:00～17:00

場所:北白川分館考古藝術共同研究室

演題等:龍門石窟初鑿窟像再考察

講演者または報告者:焦 建輝(龍門石窟研究院副研究館員、人文科学研究所客員准教授)

### ②日時:2018年12月18日 14:00～17:00

場所:北白川分館考古藝術共同研究室

演題等:龍門石窟北魏窟龕造像的分期

講演者または報告者:焦 建輝(龍門石窟研究院副研究館員、人文科学研究所客員准教授)

### ③日時:2019年1月15日 14:00～17:00

場所:北白川分館考古藝術共同研究室

演題等:鄴相仏教与龍門初唐造像

講演者または報告者:焦 建輝(龍門石窟研究院副研究館員、人文科学研究所客員准教授)

### ④日時:2019年1月29日 14:00～17:00

場所:北白川分館考古藝術共同研究室

演題等:華嚴信仰与龍門仏事

講演者または報告者:焦 建輝(龍門石窟研究院副研究館員、人文科学研究所客員准教授)

### ⑤日時:2019年2月5日 14:00～17:00

場所:北白川分館考古藝術共同研究室

演題等:龍門擂鼓台石窟寺院考察

講演者または報告者:焦 建輝(龍門石窟研究院副研究館員、人文科学研究所客員准教授)

### ⑥日時:2019年2月19日 14:00～17:00

場所:北白川分館考古藝術共同研究室

演題等:龍門石窟的“業道”像

講演者または報告者:焦 建輝(龍門石窟研究院副研究館員、人文科学研究所客員准教授)

## 4. 概要(400字程度)

中国河南省洛陽に所在する龍門石窟について、80年にわたって人文研で積み重ねてきた研究と近年における龍門石窟研究院の調査成果をふまえながら、今後の日中共同調査・共同研究を模索する。

人文科学研究所では、龍門石窟研究の現役の第一人者である、龍門石窟研究院の焦建輝先生を客

員准教授として招聘した機会を利用し、稲本泰生の主宰する「龍門北朝窟の造像と造像記」班と岡村秀典の主宰する「北朝石窟寺院の研究」班が中心となり、上記6回の焦建輝先生の講演とセミナーを開催した。使用言語は中国語、北白川分館考古藝術共同研究室にて実施した。

5. 参加者(別紙「参加状況」も記載してください。)

①学外

焦 建輝(中国龍門石窟研究院・副研究館員)、Yi Lidu(フロリダ州立大学)、黄盼(京都府立大学)、山名伸生(京都精華大学)、大西磨希子(仏教大学)、佐藤智水(龍谷大学・客員教授)、北村一仁(龍谷大学・研究員)

学内

折山桂子

所内

岡村秀典、稲本泰生、向井佑介、王星

②学外

焦 建輝(中国龍門石窟研究院・副研究館員)、黄盼(京都府立大学)、山名伸生(京都精華大学)、大西磨希子(仏教大学)、佐藤智水(龍谷大学・客員教授)、北村一仁(龍谷大学・研究員)

学内

折山桂子

所内

岡村秀典、稲本泰生、向井佑介、檜山智美

③学外

焦 建輝(中国龍門石窟研究院・副研究館員)、黄盼(京都府立大学)、山名伸生(京都精華大学)、大西磨希子(仏教大学)、佐藤智水(龍谷大学・客員教授)、北村一仁(龍谷大学・研究員)、上枝いづみ(龍谷大学)

学内

折山桂子

所内

岡村秀典、稲本泰生、向井佑介

④学外

焦 建輝(中国龍門石窟研究院・副研究館員)、黄盼(京都府立大学)、山名伸生(京都精華大学)、大西磨希子(仏教大学)、佐藤智水(龍谷大学・客員教授)、北村一仁(龍谷大学・研究員)、田林啓(白鶴美術館)

学内

折山桂子

所内

岡村秀典、稲本泰生、向井佑介、檜山智美

⑤学外

焦 建輝(中国龍門石窟研究院・副研究館員)、黄盼(京都府立大学)、山名伸生(京都精華大学)、大西磨希子(仏教大学)、佐藤智水(龍谷大学・客員教授)、北村一仁(龍谷大学・研究員)、田林啓(白鶴美術館)

学内

折山桂子

所内

岡村秀典、稲本泰生、安岡孝一、向井佑介

#### ⑥学外

焦 建輝(中国龍門石窟研究院・副研究館員)、黄盼(京都府立大学)、山名伸生(京都精華大学)、大西磨希子(仏教大学)、佐藤智水(龍谷大学・客員教授)、北村一仁(龍谷大学・研究員)、田林啓(白鶴美術館)

学内

折山桂子

所内

岡村秀典、稲本泰生、向井佑介、檜山智美

#### 6.助成金の使途等

佐藤智水(龍谷大学名誉教授)の参加旅費、岡山⇄京都往復×6回

#### 7.その他(成果や今後の展開等、自由に記載してください)

龍門石窟研究の現役の第一人者である、龍門石窟研究院の焦建輝先生より最新の研究成果を報告いただき、稲本班と岡村班の班員と討論をおこなった。今後、その成果は両研究班の共同研究に活かされていくことになる。

以下は人文科学研究所非常勤講師の佐藤智水先生による概要報告である。

##### ○第1回(2018年12月4日)焦建輝「龍門石窟初鑿窟像再考察」

龍門石窟の中で最も古い古陽洞の開鑿年次を、北魏孝文帝の洛陽遷都より前(恐らくは直前)とする見解は衝撃的であった。討論のなかで、古陽洞の開鑿発願者比丘慧成の亡父(洛州刺史始平公)については龍門研究院でも未解決であることを確認した。この報告を受けて、古陽洞に関わる諸問題のいくつかについて、その解決の端緒がみえた感覚を覚えた。

##### ○第2回(2018年12月18日)焦建輝「龍門石窟北朝窟龕造像的分期討論」

龍門における諸窟・諸龕について、① 太和・景明時期 ② 景明以降宣武帝時期 ③ 孝明帝時期 の3段階に区分し、それぞれの時期における洞窟・龕の形制、布局、題材、造型・装飾文様の特性について各々細かな整理・分析が報告された。注目点は、賓陽洞の場所について、日本では「元々は現在の奉先寺の個所」であったとする塚本善隆説が有力だが、焦氏は新旧の写真を示し、元々の計画は現在の賓陽洞の場所と同じだとし、経費の関係でその規模を縮小したことを説得的に提示した。

##### ○第3回(2019年1月15日)焦建輝「鄴相佛教与龍門初唐造像」

初唐期の洛陽龍門石窟の窟・龕・像を精緻に整理分析し、同時代の長安造像様式とは大いなる差異があるとして、むしろ龍門初唐造像はその造型の特徴及び題材内容からみて鄴相地区(旧・北齊の都)の高度な様式を継承しているとし、加えて初唐における官僚や僧俗人士の洛陽～鄴相地域の頻繁な往来史料を提示した。

##### ○第4回(2019年1月29日)焦建輝「華嚴信仰与龍門佛事」

中国における華嚴信仰の歴史的経緯をたどり、唐代高宗～則天期に興隆した龍門造像事業について、「華嚴經」で主尊とみなす“盧遮那仏(毘盧遮那仏)”と“文殊(主智の菩薩)”・“普賢(主理の菩薩)”の組み合わせが“華嚴三聖”として強く意識されたとする。文殊は獅子に、普賢は白象に乗る姿で現わされるその具体例を列挙し、巨大な盧遮那像が出現した時代状況を描写した。

従来の龍門石窟研究においては、本尊仏の尊格は北魏期の釈迦主流から唐代の阿弥陀主流へと推移していくという理解に対し、「法華經」の強い反映を認めつつも、「華嚴經」の描く壮大な宇宙観に魅かれる唐王朝政治権力の動向が看取できて、極めて興味深かった。

○第5回(2019年2月5日)焦建輝「龍門東山擂鼓台石窟寺院考察」

龍門東山万仏溝の溝口南側に、北洞・中洞・南洞からなる擂鼓台石窟があり、龍門石窟研究院はこの地域を対象に2008年以来発掘調査が行ってきた。その最新の成果情報を開陳して頂いた。

注目したのは、この地点が後漢末に設置され北魏に於いても機能した「伊闕関」の場所であるとの指摘。また、擂鼓台石窟前に発掘された巨大な木造建築跡は則天武後の勅建“香山寺”と見られること、この“香山寺”で展開された仏教は武周政権が李唐に代わる正当性を有していることを顕密の図像と礼懺で示そうとする政治的意図を内包していたとする。

則天武後の龍門への関わりは奉先寺大仏に凝縮されていると理解していた筆者は、本報告に示唆を受けると同時に、武周革命の困難さと凄惨さに衝撃を受けた。

○第6回(2019年2月19日)焦建輝「龍門石窟的“業道”像」

龍門石窟の銘記に“業道像”と刻される例は14例しかなく、しかもそれらは他の尊像と明確に区別できる特徴を有していないこと、また時期的には、則天武后期に集中していることが提示された。報告では“業道”の用例を儒仏道の文献を渉猟して例示し、その上で敢えて仏典に根拠を見出すとすれば、密教系仏典に見える“業道”表現に近く、それによれば、その尊格は「仏・菩薩・金剛・諸天」より下位に位置するという。“業道像”であるか否かの尊格の特定は、銘記に頼るしかなく、そのため他地域への伝播のありさまも不明。単独石像としては、ロスアンゼルス芸術博物館に1点の作例があるという。

“業道像”は、造像供養の至尊としては経典に明確な根拠がないにも拘わらず、ほぼ龍門の則天期に集中して現われる、その意味について重い問題提起を受けた。